INTERVIEW

練馬光が丘病院　管理者
光定 誠先生

総合救急診療と専門医療を両輪とする地域の病院として.

聞き手：山田隆司　地域医療研究所長

救急外科医として充実した日々

山田隆司(聞き手)　今日は10月11日に開院した練馬光が丘病院新病院で，管理者の光定誠先生にお話を伺います．立派な病院になって，本当におめでとうございます.

まずは先生の経歴と，練馬光が丘病院の管理者として，先生が着任された経緯などをお話いただければと思います.

光定 誠　自治医科大学卒業が1982年，東京都の５期生です．初期研修は都立駒込病院で２年間スーパーローテート研修を受けました．駒込病院ではがん診療が中心でしたが，小笠原村に赴任することになりそうだということで，小笠原ではすぐに病院に搬送することはできないこともあり，重症の救急などを診られるようにと３年目で都立広尾病院の麻酔科･救急に移り，４～５年目で小笠原の父島に赴任しました.

山田　最初のへき地勤務が父島だったのですね.

光定　そうなのです．それで６年目に帰ってきて義務明けまで広尾病院の消化器外科にいました．その間にもう１回小笠原に半年行きました．当時は村長が「島でお産を！」ということを掲げていたので，診療所長は産婦人科の先生で帝王切開だけでなく，外科もやって虫垂炎，ヘルニア嵌頓などの手術もしていました.

山田　そういう時代でしたね．当時は島でお産を継続することが村長さんの政治生命のようでした

ね．先生は義務年限のなかで２回父島に行かれたということですが，合計どのぐらい行かれたのですか.

光定　２年半です．そのあと伊豆大島に半年行きました.

山田　それでへき地勤務が終わったわけですね.

光定　広尾病院で義務が明けて，それから１年間自治医科大学附属大宮医療センターでお世話になりました．その後また広尾病院に戻り，最初は外科に所属していましたが，石原慎太郎都知事が「東京ER構想」を打ち出した頃で，当該都立病院の一つであった広尾病院の救命救急センターの立ち上げに加わり，2003年からセンター長として2010年まで勤務しました.

山田　東京ER構想で，初期･二次救急から高度救命処置までを担うことになり，広尾病院の救命救急センターは相当忙しかったと思います.

光定　はい．離島からのヘリ搬送は絶対断らないという気持ちでしたし，三次救急の収容も倍増しました.

山田　広尾は離島の搬送の核になっていますからね．先生は外科系の救急医という感じだったのですか.

光定　三次救急は初療は救急専従医が対応して，それから専門医に引き継ぐというスタイルでした．躯幹外傷などの場合は自分たちでそのまま加療しました.

山田　重度の外傷などが搬送されるわけですね.

光定　はい．交通外傷や墜落外傷が診療のメインで，なんとか命を救おうとモチベーションが高かったですね．しかし2000年代に入ってシートベルトの普及などで重症交通外傷が激減しました．またIVRが発達して例えば肝損傷なども，かなりの部分が対応できるようになり墜落など重症外傷の手術も減りました．自分の仕事も重点が急性腹症や消化器癌の手術にシフトしましたが，もっと地域で救急に関与したいなという気持ちはありました.

山田　その後，協会から声がかかったわけですね.

光定　以前，東京北医療センターの立ち上げの時にも少しお話もいただいていたので自分から吉新通康理事長に会いにいきました．協会が運営する横須賀市立市民病院に広尾病院の医師が以前働いていた話を聞き，三浦半島の西側の救急に関心があったのですね．ところが反対側の横須賀市立うわまち病院へ行くことになりました．うわまち病院は当時まだ２次救急でしたが，本多英喜先生がERを手広く対応されていて，私は外科に赴任して協力して働きました.

山田　うわまちに何年くらいいたのですか.

光定　約１年です．その１年後の2012年に練馬光が丘病院に着任しました.

協会が運営を開始した練馬光が丘病院に赴任

山田　協会にとって練馬光が丘病院のスタートは大変でしたよね．突然「日大が練馬光が丘病院から撤退する，何とかならないか」という話が協会にきて関わることになったのですが，そうなるまでにはいろいろな経緯があったようで移行に関する反対運動も起こりました．政治的な，